

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

# 無碍の一道 第78号

発行:2021年5月1日

発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺  
〒739-0147 副住職 天野英昭  
東広島市八本松西6丁目10番1号

☎・FAX 082-428-1360

## 宗祖親鸞聖人降誕会法座

日時 5月31日(月) 9:00~15:00

朝席 9:00~11:00 昼席 13:00~15:00

ご講師 安芸高田市 善立寺住職 松林 行圓師

## 安居会法座

日時 7月1日(木) 9:00~15:00

朝席 9:00~11:00 昼席 13:00~15:00

ご講師 広島市西区己斐 善法寺坊守 前田 純代師

## 第108回 歎異抄輪読会

日時 5月20日(木) 14:00~15:30

ご講師 広島大学名誉教授 松田 正典先生

参加費 500円(ご自由にご参加ください)

## 天龍寺仏教壮年会 定例会

5月31日(月) 19:00~20:30

## 天龍寺仏教婦人会 清掃奉仕

6月12日(土) 13:30~15:00



## 桜の花の散り方も様々だと思ふことです。

当山の桜は、4月上旬が満開でした。それから時間が過ぎ、現在は花はありません。当山の桜の花は、毎年約2週間ぐらいしか咲いておりません。桜を見ていると人の人生も同じような物かとも考えることがあります。

桜が散っていく様子を見ていると人間も含め、この世の生きとし生けるものの相を感じることもあります。

風が吹き、散る花もあれば、残っている花もあります。同じような状況の中にありながら、花によって散り方はさまざまであると思ひます。

しかしながら、当たりまえの話ではありますが、残っている花もいつかは散っていきます。これが自然の摂理・道理であると還暦を過ぎ、しみじみ思ふことでもあります。

ある意味、全て滅びていく物の相は、寂しくもあり、哀しくもあるものかとの点も感じることであります。

時に思ひますことに、日々私たちが執<sup>しゅうちやく</sup>着(とらわれる)している健康・家族・財産等も生きていく過程で、少しずつ手放しながら娑婆の縁を去っていく存在であると思ふことです。

今の私には、30代、40代の健康な体はありません。昨年、ある奥様が『今年から年賀状は止めた。』と言われたことがあります。若い時のような交友関係を築いていくことが出来なくなり、友人・親しい人たちとのご縁も薄くなっていくと思はされたことであります。さらにいくらこの世で名誉・財産を得ても、この世に残していかななくてはなりません。

高飛車な言い方になりますが、先般日本経済新聞を読んでおりましたら、ある企業が3兆円の利益を出したと大きく記載されておりました。

この企業のトップの方も、この世の終わりが来ますと茶毘に付され小さなお骨箱に入られると新聞を読みながら思ふことです。

しかし、捨てていかななくてはならないと自覚をしながらも娑婆の縁が尽きるまで、その様なものに執着しながら生きていかななくてはならない存在であると自分を鑑みながら実感することでもあります。人間の欲は、娑婆の縁を去る瞬間まで、なくならないものだとも還暦を過ぎしみじみ思ふことです。

『救われるとは、自らの煩悩が全て生かされることである。』とS先生の本にありました。また『順逆二縁を大切にしなさい。』とも記してありました。

この境涯で味わう喜怒哀楽もすべて南無阿彌陀仏のご縁といただきながら、厳しい現実の人生を私なりに歩めたらとも思ふことです。

さらに『名もなき一生が価値がないと思ふのは、智慧の眼がないからである。』と書かれていたと記憶しております。

今、私が歩んでいる道は、私にしか歩めない道であると思ひます。桜は桜の花しか咲かすことが出来ず、道端に咲いている小さな花は、小さな花しか咲かすことが出来ません。一方で、どの花にも輝きがあると思ひます。

また、どの花も若い時には若い時の輝きがあり、当山の100年経つ桜のごとく、100年には100年の輝きがあると思ひます。

私の残りの人生も、その時にしか放てない、私なりの輝きを放ちながら、厳しい現実の人生を生きていければとも思ふことでもあります。